

第4節 徳島における弥生時代の武器と戦いのはじまり

1 はじめに

庄・蔵本遺跡は徳島におけるもっとも代表的な弥生時代の遺跡である。ここでの遺構・遺物は弥生時代前期に多く、徳島での縄文時代から弥生時代への歴史的変革の具体的様相を明らかにしつつある。

ところで、弥生時代はそれ以前の狩猟・採集・栽培を生業とする縄文時代とは異なる、本格的な稻作を行う農耕社会の成立した歴史的な一大変換点である。この時代の成立には稻作という生産形態のみならず、集団関係や思想など日本列島の社会全体に新たな変革を引き起こしたことはいうまでもない。この社会的な変革を伴って、弥生時代にはじめて出現した重要な社会現象の一つに人が人を殺す行為、「戦争」がある。日本列島における本格的な戦争は弥生時代に始まった。その物的証拠として、佐原真（佐原 1991）は1 防御集落の出現、2 武器の出現、3 戦士の墓の出現、4 武威崇拜の始まり、という指標を示している。

それではこの歴史的変換点において、戦争という面で徳島はどのような状況であったのであろうか。ここでは佐原の指標を参考にし、徳島のとくに吉野川下流域における戦争の始まりについて若干検討を加えておきたい。

2 徳島における弥生時代の武器

考古学的に戦争の出現をとらえる場合、もっとも認識しやすい現象に戦闘用武器の出現があげられる。弥生時代に出現したもっとも一般的な戦闘用武器は戦闘用石鎌を付けた弓矢と石製の剣・槍・戈などである。ここでは、まず徳島における石製刺突武器についてみていきたい。⁽⁴⁾

(1) 石製刺突武器

徳島市 [庄・蔵本遺跡] 第9次調査地点：本文第4章で報告したものである。サヌカイトを打製整形し、磨製調整を施したもので、形態は両側縁刃部が平行し、断面菱形を呈する（図129-1）。出土層位が弥生時代前期後葉に属している。最終調整は研磨を行い、表面上は磨製品のように見えるが、サヌカイトを用い、基本的には成形は打割によっている。形態・技法的には弥生時代中期に盛行する打製刺突武器と系譜的に連なることが明らかである。サヌカイトという硬質石材を製作過程ではなく、仕上げ段階に全面研磨し、鎬を作り出す技術背景には、打製刺突武器が初期段階には磨製石剣の影響を受け成立した可能性を示している。推定復元長21cm以上、幅5.9cm、厚さ2.6cmをはかる大型品で、禰宜田分類（禰宜田 1996）のIII-1'-aに属する。氏は唐古・鍵遺跡の前期新段階の土坑出土例を槍とし、この種の大型品は槍ないし戈である可能性を指摘している。

徳島市 [庄・蔵本遺跡] 第7次調査地点（大西編1988a）：徳島県教委による調査で出土。の東に隣接する地点で、土坑より前期末の土器と共に出土しており、時期的にも全く同一の集落の住居者によって用いられたと考えられる（図129-2）。長さ約16.5cm、幅約3.7cm、厚さ約1.1cmほどで、禰宜田分類II-2-aに属し、短剣とみなされる。比較的薄く扁平であるが、鎬をもち菱形状に作っている。基部付近はさらに扁平で柄を取り付けたのであろう。

徳島市 [南庄遺跡]（三宅1995）：徳島市教委による調査（平成6年度マンション工事）で、中期後半の竪穴住居より出土している。基部は欠損し、全形は不明であるが残存長7.4cm、幅2.1cm、厚さ1.1cm

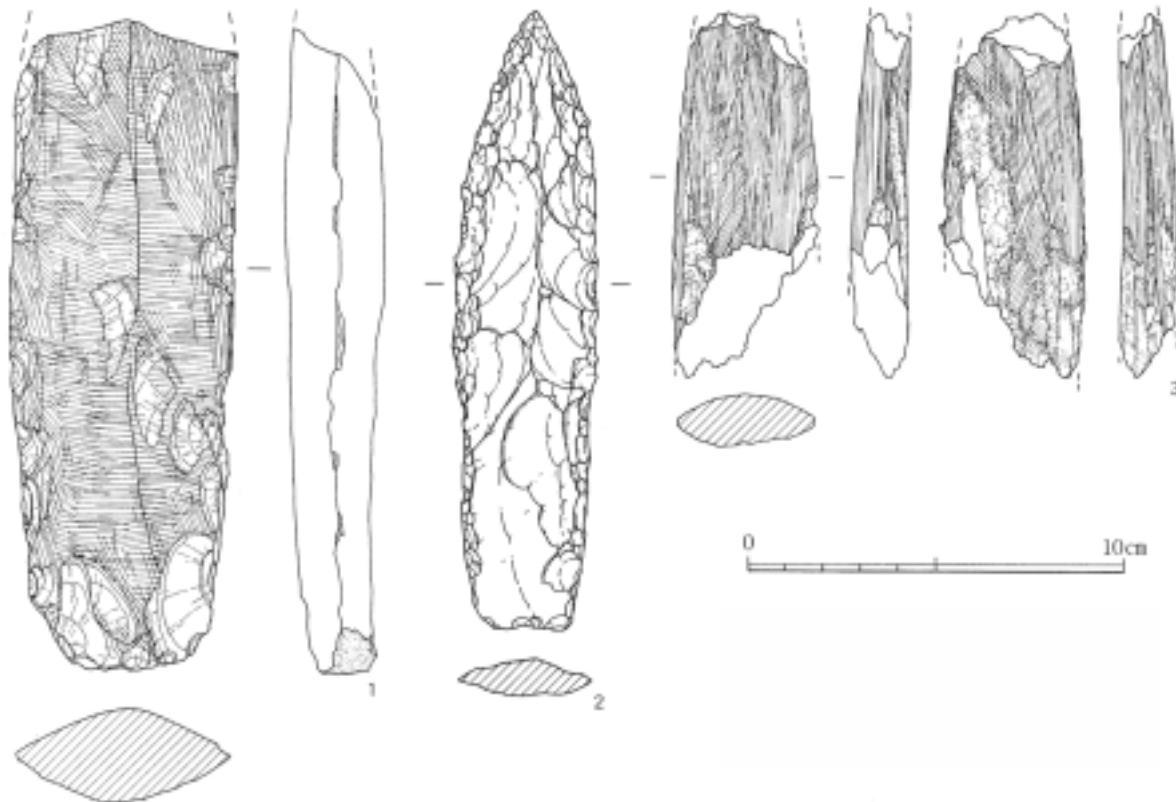


図129 庄・蔵本遺跡出土の石製刺突武器

をはかる。同遺跡別地点でも未報告であるが、中期に属する完形品が出土している(一山・滝山1985a)。

徳島市[矢野遺跡](柴田1992):徳島県教委による1987年度調査で中期後半の溝の上面から出土している。長さ14.0cm、幅2.9cm、厚さ1.3cmをはかる。中央に剥離面を大きく残す扁平な断面六角形を呈する。II-2-aに属する。

その他、吉野川中流域では阿波郡阿波町[桜ノ岡遺跡]における徳島県埋蔵文化財センターの調査で、弥生時代中期に属する礼が6点出土しているが、いずれも破片資料である。

庄・蔵本遺跡の は弥生時代前期後葉に属し、近畿及び周辺地域を含めても比較的早い段階に位置づけられ、徳島では石製武器出現段階のものとできる。一般に中期の場合、打製刺突武器は二上山サヌカイト産出地である大阪・奈良を中心とする近畿地域と金山サヌカイト産出地の香川と対岸の岡山を中心とする瀬戸内地域とが核となる分布圏を形成している。そのうち、近畿のものは断面菱形で厚く、大型品がみられる一方で、瀬戸内地域では薄く、中央に鎧をもたず断面六角形のものがみられることが指摘されている。(禰宜田1986・松本1989)。そのような視点で見た場合、時期的にはさかのぼるが、

は明らかに近畿的様相を呈し、この武器が近畿地域より持ち込まれたものであることを示している。また、 が扁平で薄く金山産サヌカイトと考えられるが鎧をもち、やはりその成立に近畿地域との関係も考えられる。すなわち、石製武器出現段階に徳島の少なくとも吉野川下流域はすでに近畿の影響を受けていたと考えられる。武器の出現からみた場合、徳島における弥生の戦争が西方からではなく、東の近畿地方を経由してもたらされた可能性も考えられるであろう。

以下の他の資料は中期後半に集中し、この時期に再び戦争を含む社会的緊張関係が高まっていたことを示すようである。 は形態から瀬戸内地系の打製刺突武器と考えられる。前期と中期後半とでは武器の系譜が異なり、その背景に戦いの要因、領域などが異なる可能性が考えられるであろう。

(2) 磨製石剣

庄・蔵本遺跡第15次共同溝地点の弥生時代前期中葉～後葉と考えられる包含層中から磨製石剣1点が出土している(図129～3)。先端部・基部ともに欠損し、全体の形態は不明である。粘板岩製で断面はレンズ状を呈する。他に南庄遺跡でも、弥生時代中期の例が出土している(一山・滝山1985a)。詳細は未報告であるが基部の破片で、基部端に穿孔をもち、逆台形となる。

庄・蔵本遺跡例の出土層位は打製刺突武器・と同じ層位に対応するが、同一層中でも最下層部から出土しており、・に先行すると考えられる。つまり、サヌカイト研磨の打製系譜につながる刺突武器以前に、同一遺跡内で磨製石剣が存在しており、磨製品が打製品の先行形態として存在し、その影響の下に打製品が成立したとみることができる。すなわち、庄・蔵本遺跡では弥生時代前期のうちに石製刺突武器に以下のような変遷がみられる。

粘板岩製・和製石剣 サヌカイト製・打製+磨製刺突武器 サヌカイト製・打製刺突武器 中期へ

3 徳島における弥生の戦争とムラ・墓・まつり

(1) 環濠集落

溝や柵列で集落の境界を区切り、人の出入りを見張り、外敵の侵入に備えた防御的集落は弥生時代の環濠集落に始まり、この時代に戦争が始まったことを示す一つの指標と考えられている。

庄・蔵本遺跡第13次(貯水槽)調査地点と第15次調査溝地点の調査では、弥生時代前期の環濠とみられる弧状のカーブを描く大型の溝が発見された。溝の形成には2段階存在し、最初は1条であったものが、次に巨大な2条の並行する溝になる。溝の内側には柵列の存在も確認された。内側溝の幅は2m、深さ1.3m、外側溝の幅は3.5m、深さ1.5mある。さらに、弥生時代前期の遺構は溝の内側に集中し、外側では疎らになる。本地点は眉山北麓に延びた尾根先端部の低位な台地状に位置し、西へ広がる平地の東端にあたる。また、庄・蔵本遺跡以外では、南庄遺跡でも弥生時代前期後半を中心とする環濠状遺構が確認されている。しかし、ここでは同時期の遺構はあまり多くない。(一山・滝山1985a)。

徳島における弥生時代前期の環濠集落は、庄・蔵本遺跡において二本の溝と柵列とが一体の防御的性格をもって成立していることに注目できる。さらに前項の磨製石剣はこの環濠の内側より出土したものである。打製刺突武器・の出土位置も二本の溝から100m程度しか離れていない。ここでは弥生時代前期段階に環濠集落・石製武器が揃ってみられるのである。ここが歴史上、徳島においてはじめて戦争がもたらされた地であった可能性は高い。

(2) 武器をともなう墓

近年、弥生時代の墓から骨に刺し込まれた剣の先端部や鏃の出土が知られるようになり、この時代の埋葬施設から出土する武器は戦いに関連するものと考えられるようになってきた。これまでの資料は九州に多く、近畿でもその存在が確認されているが、四国を含めそれ以外の地域ではいまだ類例に乏しい。

しかしながら、本文第2章で報告した土壙墓3は徳島において唯一の埋葬施設に武器が伴う例として注目できる。この土壙墓3は弥生時代前期前葉に属し、管玉11点とともに石鏃8点が出土している。

管玉・石鏃はともに埋葬施設内の西半部に散在した状態で出土している。石鏃は被葬者の葬送儀礼にともなう副葬品、あるいは人体に打ち込まれた状態のいずれかと考えられるが、遺体が残っていない現状での判断は不可能である。22基にのぼる墓群の中で管玉を副葬するのが、この土壙墓3と配石墓11だ

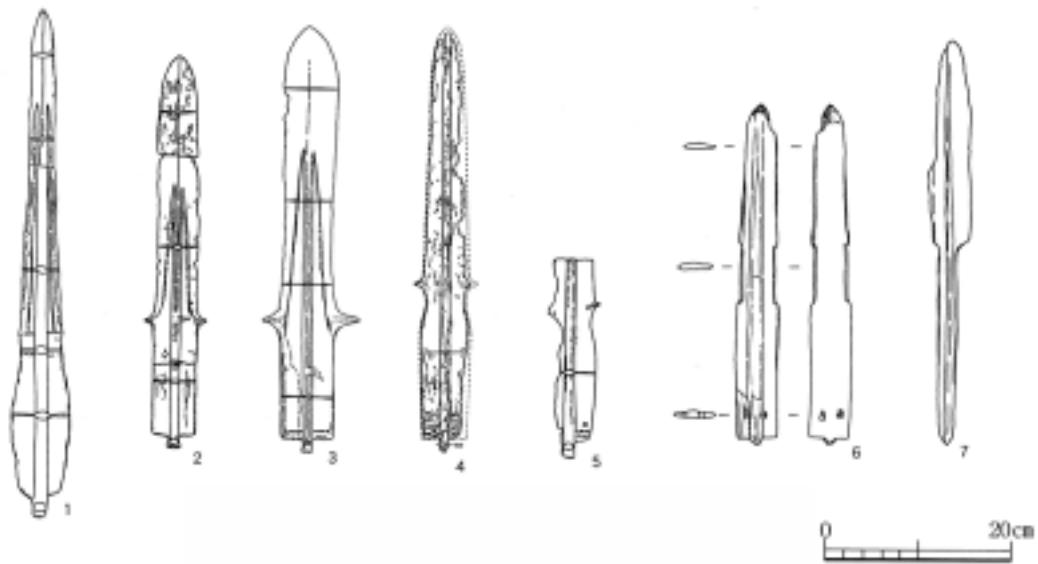


図130 徳島における武器形祭器

けであることからも、土壙墓3が他の墓とは異なる特殊な埋葬施設であることは間違いない。そこには被葬者の生前の社会的地位が反映されている可能性があるものの、それが被葬者の生前かかわった戦闘行為と関係があるかまでは現状ではわからない。石鎚も狩猟用と戦闘用の未分化段階の小型の石鎚であるため、必ずしも人との戦いに関係あるとは断定できない。ただし、この墓群の造営年代は庄・蔵本遺跡の環濠の成立年代とほぼ併行することから、徳島における社会的緊張関係と戦争とのかかわりをもつ可能性もまた否定できない。

(3) 銅剣・剣形木製品

さらに、武威崇拜のまつりにかかわる遺物も社会的に戦闘行為の存在したことを示すものの一つである。徳島における武威崇拜にかかわる遺物には武器形祭器として銅剣と剣形木製品がある。

まず、銅剣では以下のものがある（吉田・高山 1996）。徳島市〔源田遺跡〕では中広形銅剣1点が銅鐸3点とともに出土している（図130-1）。銅鐸は扁平鈕2式が2点、突線鈕1式が1点である。名西郡神山町〔東寺遺跡〕では平形I式・東部瀬戸内系平形の銅剣が2点出土している（図130-2・5）。また、同じ神山町の〔左右山遺跡〕からは平形II式・東部瀬戸内系平形の銅剣2点が出土している（図130-3・4）。

また、徳島市〔庄遺跡〕兵営西内線地区では自然河道内の中期後半～後期前半の層位から多数の木製品とともに、剣形木製品が出土している（一山・滝山 1985 b）。片面には脊を表現し、側面中ほどには割方をもち、幹部に双孔をあけ、銅剣をモデルとしたことは明らかである（図130-6）。庄・蔵本遺跡とは同一の遺跡で、地点の違いで呼称が異なるに過ぎない。さらに、庄・蔵本遺跡第5次調査地点（大西編 1988）でも剣形木製品が出土している（図130-7）。

ところで、徳島には全国的にみて銅鐸の出土数が多い、銅鐸祭祀が盛んに行われた地域として知られている。その背景には近畿地方との密接な技術的・宗教的つながりがうかがえる。一方で、平形I式・II式の銅剣は香川・愛媛地域を中心に盛行する武器形祭器である。特にII式は瀬戸内側四国地域に顕著な分布を持っており、共通の祭祀を共有する地域圏として成立している。銅鐸祭祀を主として行う徳島では、銅剣祭祀はこの地域より影響を受けて行われたものと考えられる。

ところが、庄、庄・蔵本遺跡における剣形木製品の存在は、徳島においても銅鐸のみならず銅剣の祭祀も一般的な集落で行われ、青銅器に限定しない場合も含めると、武器形祭器の使用は決して特別なものではなかったことを示している。また、南庄遺跡で出土した特異な形態をもつ銅鎌は銅剣の再加工品とも考えられており（高島 1994）これを妥当とすれば銅剣が一般的な集落にある程度浸透していたことを示している。源田遺跡でも銅鐸と銅剣が共伴し、両者は共存しうるものであったことがわかる。あるいは、東部瀬戸内系と呼ばれる独特の形態をもつ、類例の少ない銅剣が東寺・左右山と神山町域の狭い範囲から出土しており、瀬戸内地域の影響のもとに武器形祭器を用いる祭祀を独自のものとして取り入れ、定着させていた可能性も考えられる。

武器形祭器は武威崇拜の祭祀に用いられるものである。徳島において現状ではこの武威崇拜の祭祀は、各銅剣の型式的特徴、源田遺跡の共伴銅鐸の型式、庄遺跡の出土層位などから、中期後半から後期前半以降に位置づけられる。それは地域内の抗争の枠を越えてある程度の地域的なまとまりをもつ単位間の広域的抗争の行われ始める時代と考えられる。

4 徳島における戦いのはじまり

以上までに弥生時代の徳島における刺突武器の諸例、防御集落の出現、戦士の墓、武威崇拜という要素を概観した。このうち、武器と防御集落の初現は前期の庄・蔵本遺跡でみることができ、また石鎌を伴う墓もあった。これらの状況は、現状では庄・蔵本遺跡が徳島においてはじめて戦争の行われた場所である可能性を示している。

庄・蔵本遺跡の弥生時代の戦いに関係する遺構・遺物をあらためて図131に示し確認しておこう。ま

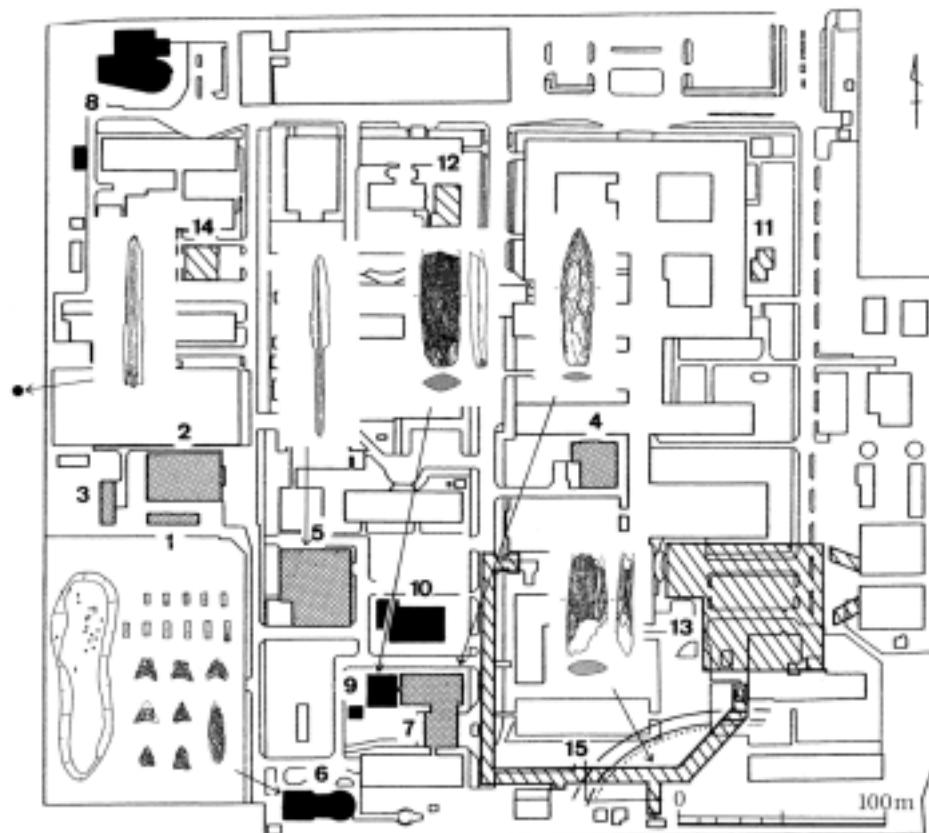


図131 庄・蔵本遺跡出土の弥生時代戦争関連遺構・遺物

ず、弥生前期前葉には環濠集落が成立する。同時に墓域が形成され、中には管玉・石鏃を伴う土壙墓3がある。石製武器は環濠内側の地点で前期前葉以前の磨製石剣が出土し、前期後葉では環濠から西へ100mの地点で石製刺突武器が2点出土している。このように庄・蔵本遺跡の前期には、人が人を殺傷する戦いという新たな文化がもたらされていたことは間違いないであろう。また、中期後半から後期前半には剣形木製品がみられ、第5次調査地点では剣形木製品とともに同時期の盾も出土している。庄・蔵本遺跡では、中期後半以降にも再び戦争にかかる資料が集中する。

武器づくりの技術、内と外とを区別し戦いに備える集落形態は、いずれも自生的に成立したのではなく、新たに他地域からもたらされた弥生文化の一要素であったと考えられる。徳島における弥生文化の形成にはさまざまなルートからの影響が考えられるが、石製武器からみると近畿地方の弥生文化からの影響を多分に受けていると考えられる。

また、徳島では前期の後に、武器の存在、集落の盛行、武器形祭器がみられ戦いの存在をうかがえるのは、中期後半以降である。中期後半以降は集落数も増え、前期とは性質・規模が異なる農業共同体間の利害関係を背景とする広域的抗争が行われた可能性も考えられるであろう。

註

- (1) 戦闘用武器としてはこれまで石鏃の分析が多く行われ、成果を上げている。しかし、これにかんしては今回は十分に統計的分析などができるなかったので、今後の課題としたい。また、ここでいう打製刺突武器は研究史的には石槍と呼ばれたものであるが、打製石剣の発見以降、近年は石槍・石剣・石槍状石器・槍先形石器・尖頭器などと名称が混乱している。現状では槍・剣・戈などと機能から分類するの不可能と考えるが、一方で殺傷用の武器としての意味を重視する上でここでは暫定的に「刺突武器」とした。今後の形式学的研究の進展を待ちたい。
- (2) 他に、徳島県出土の平型II式銅剣が東京国立博物館に所蔵されている。また、神山町下分・銅剣1点、那賀郡内・銅剣1点、三好郡西祖谷山村久及名・銅剣2点、同村榎名・銅剣1点、同村内・銅矛2点、美馬郡美馬町内銅剣1点があったとされる(吉田・高山1996)。

引用・参考文献

- 一山 典 1994 「弥生時代の武器・武具」『第14回 阿波を掘る』(徳島市教育委員会)
- 一山典・滝山雄一 1985 a 『庄遺跡の人々のくらしと文化』(徳島市教育委員会)
- 1985 b 「徳島市庄遺跡出土の弥生時代木製品」『考古学ジャーナル』252
- 大西浩正編 1988 a 「庄遺跡(徳島大学蔵本団地内)」『掘ったでよ阿波』(徳島県教育委員会・徳島県郷土文化会館)
- 大西浩正編 1988 b 「庄遺跡の木製品」『掘ったでよ阿波』(徳島県教育委員会・徳島県郷土文化会館)
- 佐原 真 1991 「戦いと男と女」『弥生文化博物館叢書1 弥生文化』(大阪府立弥生文化博物館)
- 柴田 昌児 1992 「矢野遺跡」『弥生時代の石器』(第II部第4分冊 埋蔵文化財研究会関西世話人会)
- 高島 芳弘 1994 「石から鉄へ」『描かれた弥生人のくらし』(徳島県立博物館)
- 禰宜田佳男 1986 「打製短剣・石槍・石戈」『弥生文化の研究』第9巻(雄山閣出版)
- 松木 武彦 1989 「弥生時代石製武器の発達と地域性 - とくに打製石鏃について」『考古学研究』35 - 4
- 三宅 良明 1995 「南庄遺跡発掘調査概要 - マンション建設工事に伴う発掘調査 - 」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要5』(徳島市教育委員会)
- 村田 幸子 1992 「近畿の弥生時代の成立過程 - 石剣・石槍における製作技術の多様化を中心に - 」
『弥生時代の石器』第6分冊(埋蔵文化財研究所関西世話人会)
- 吉田 広 1993 「銅剣生産の展開」『史林』76 - 6
- 吉田広・高山剛 1996 「武器形青銅器集成」『弥生後期の瀬戸内海』(古代学協会四国支部)